

満州開拓の経過と長野県からの開拓民

徳 永 英 夫

一 はじめに

昭和初期、長野県における満州開拓移民の送出総数は三万三〇〇〇人に達し、全国の一二・五⁽¹⁾を占めていた。その数の多さとともに、この満州開拓移民事業に集中したエネルギーと苦難の歴史は、当歴史館の常設展示（タイトル「昭和恐慌と満州移民」）にも特記されている。第二次世界大戦後、五〇年以上を経た今日、一つの節目が意識されて、満州開拓当時の厳しい体験と苦労が風化されることなく、その苦い教訓の中に現代に生かされるものがないのかと、今回このテーマを設定した。

昭和恐慌といわれる大不況を打開するため、農村経済更生運動の一環に満州移民が重要な国策として取り上げられた。その要請に応えて、「五族協和・王道樂土」の建設運動が官民一体となって強力に推進された。特に、長野県が取り組んだ独自の満州開拓政策として、「満州信濃村・満州長野村建設の全県的編成移民」や「分村移民」など大量の移民が展開された（一九三二—一九三九年）。それらの実態について明らかにすることが、本論の課題である。

これまでの長野県にかかる満州開拓概説史では、長野県開拓興業会編『長野県満州開拓史』（一九八四年）が定説になっている。大量移民については、榎木俊一は経済更生で耕地を適性規模に再編成するため分村移民がおこなわれたと述べ、池上甲一は、分村移民は農業過剰人口の是正の目的だけないと評価した。⁽²⁾玉真之介は、分村移民が満州国での農業開発を担う要員であったと分析した。⁽³⁾ま

た、「日本・中国共同シンポジウム」（一九九五年、松本市）が組織され、多くの証言が分析され研究の視点が広げられている。⁽⁴⁾

本稿では、（一）昭和恐慌と対応策としての移民、（二）満州開拓事業の経過、（三）満州移民の営農・生活と帰国後の開拓事業について明らかにする。

二 昭和恐慌と対応策としての移民

1 昭和恐慌の発生と農村経済更生運動

第一次世界大戦後の不況・好況の波から、一九二六年（大正一五）以降は本格的な景気の後退が始まった。そこへ一九二七年（昭和二）の金融恐慌と大霜害が重なり、当時の長野県経済の七〇⁽⁵⁾までも占めていた蚕糸業は大きな打撃を受けた。そして、一九三〇年には世界大恐慌の影響もおよんできて、繭価は四分の一に暴落した（表1）。その年は米価も豊作飢饉により、一石二五円から一五円に値下がりして、長野県下の農家は一戸当たり一〇〇〇円以上の負債を抱え込んだ。一月には県下第一の信濃銀行が預金の支払い停止を発表し、個人ばかりでなく、市町村や産業組合などの法人の機能までも麻痺した。

農家の子女の主な働き場所であった製糸工場が一斉に休業し、一九三〇年には須坂の山丸組、岡谷の山十組をはじめ信州を代表する製糸工場など一九工場が倒産し、八四七工場のうち三一九工場で賃金未払いとなつた。さらに、この年の八月一日付けで、失業者は九七〇〇人、半失業者は五万八〇〇〇人となつた。特に、

満州開拓の経過と長野県からの開拓民

表1 長野県下の繭価格の変動

年	繭総価額 (指数)		収繭高 (指数)		繭一貫当り
	千円	%	千貫	%	円
1925	106,754	100.0	10,523	100.0	10.14
1926	83,635	78.3	10,133	96.3	8.25
1927	46,983	44.0	8,525	81.1	5.51
1928	58,069	54.4	10,266	97.6	5.65
1929	82,469	75.7	12,689	120.6	6.49
1930	33,270	31.2	13,022	123.7	2.55
1931	31,352	29.4	11,077	105.3	2.83
1932	30,971	29.0	9,922	94.3	3.12
1933	52,776	49.4	10,983	104.4	4.8
1934	20,571	19.3	9,430	89.6	2.18
1935	35,578	33.3	8,864	84.2	4.01
1936	37,651	35.3	8,077	76.8	4.66
1937	41,331	38.7	8,441	80.2	4.89
1938	50,546	38.0	8,715	82.8	4.65
1939	103,321	95.8	10,739	102.1	9.62
1940	95,678	89.6	9,811	93.2	9.75

(注)『長野県統計書』各年度版による。

農村の窮状が広がり、八割の家が麦三分の麦飯を常食にし、また、野菜を混ぜた様飯を食べるような状態になつた。⁽⁶⁾ 電気も休灯・廃灯する家が二割にも及んだ。学校では弁当を持参できない子どもや、子守りや手伝いのため欠席する児童・生徒が一〇〇〇人にも達した。不況は商業・交通業など第三次産業にも及んだ。長野県においては、一九三〇年(昭和5)九月一日に「県民経済救済」のための臨時県会が招集された。審議の結果、「(1) 耕種農業では養蚕偏重の弊を打破するため、畜産・果樹栽培・副業・自給肥料の増産など積極的に奨励する。(2) 養蚕では稚蚕共同飼育を奨め、生産費の引き下げを図る。」などの県独自の新施策もおこなうことになった。また、国の「失業救済農村漁村臨時対策低利資金」からの五二七万七〇〇〇円(年率四分二厘)を割当てたが、南佐久郡野沢町(佐久市)をはじめ三四か町村からの二八〇〇万円にのぼる要求となり希望はわずかしかかなえられなかつた。⁽⁷⁾ しかし、一九三一年から一九三三年にかけて、失業者救済の切り札にと、土木事業が大規模に施行(三か年で一〇〇〇万円以上の事業)され、その上一九三二年から一九三四年にかけて、産業振興・農村振興の取り組みもなされた。国道二線、県道一四線、町村道一〇線の改良工事が合計七一か所で進められ、長野・飯田線は重点路線に位置づけられた。この間に、県では「総

表2 経済更正特別指定村の概況

町 村	小県郡浦里村	諏訪郡四賀村
戸数(集落数)	816(5)	556(7)
主要作物	米、麦、粟、大豆、蕎麦、馬鈴薯、蔬菜、果実	米、大豆、梨、馬鈴薯、生糸、寒天、凍み豆腐
村治の状況	円満	円満
各種産業団体の状況	農 会	会員数: 1,132 技術員: 1 成績: 良
	産業組合	組合員: 744 成績: 良好
	そ の 他	農事組合: 24 養蚕組合: 17 養鶏・養豚組合あり
教育の状況	実業補習学校青年訓練所等	実業補習学校青年訓練所等
交通の便否	上田温泉電車出浦駅	中央本線上諏訪駅

(注)『産業の基礎』1933年4月号による。

額約二億円の県下農村の負債整理と農村局面の打破と農村経済の改善を図ること」の課題に、県産業組合・県農会・県町村長会などの要望を受けて、長野県農村経済改善調査会を組織し、改善策を決議した。その県の組織体制を受けて、郡市町村にも各経済改善委員会を作りそれぞれの更生計画を立てることになった。なお、その時の付帯決議で、「満蒙新国家に対する集団的移住の実現を図られたい。」という、満州移民の文言が初めて登場した。

「モデル更生村」となった小県郡浦里村（上田市）では、二〇〇戸一組の農事実行組合を全村に作り、この組織を基礎に第一次、第二次五か年計画が立てられた（表2）。そして、青年村長を先頭に、貯水池建設、浦野川改修、農道新設、河川敷開墾を進め、桑園の水田化を図り、諸会合での禁酒の断行や食生活の改善にも取り組んだ。さらに負債整理（一五〇万円のうち、約二五万円整理）のため、農村工場の建設も進めた。しかし、全村民の和と氣力、そして、人的要素の問題、農村部落における固有の美風として隣保共助の精神が強調され、「精神更生」へより傾斜した。県からの掛け声が一段と強まり、本来の自力更生による「理想郷の建設」運動は、満州移民に三五世帯、青少年義勇軍にも一〇名以上が参加し、戦争体制の中に取り入れられていった。

全県的にも、負債整理事業は遅々として進まず、合わせて「過剰人口」解消の課題にも対応することで、「満州移民」の要望の重みはさらに増した。そして、一九四一年（昭和十六年）、経済更生運動との太いパイプを結んで、満州への移民計画が重要国策となっていました。

2 信濃海外協会とブラジル・北海道移民

表3 長野県からの北海道移住者戸口および目的別人口調（1933年1月、北海道庁）

年度	戸数	人口	農業人口	その他
1918	181	298	298	—
1919	172	399	399	—
1920	55	90	90	—
1921	36	70	70	—
1922	48	72	72	—
1923	27	44	44	—
1924	14	36	36	—
1925	36	74	74	—
1926	27	59	59	—
1927	16	64	64	—
1928	24	69	69	—
1929	48	118	118	—
1930	31	60	59	—
1931	40	139	130	—
1932	40	102	102	—
合計	2355	4661	4425	136

（注）行政文書「北海道自作農許可移民に関する件」
長野県立歴史館蔵

満州移民以前の長野県民の海外渡航状況調査⁽⁸⁾によると、一九一四年（大正三）の在外県人は、五五四四人であった。この年、信濃教育会は長野県の五大教育方針を決定した。すなわち、工業教育・発明教育・育英教育・科学教育及び海外発展主義教育である。このうち海外発展主義教育の研究委員らは、南・北アメリカなどの巡回講演を幻燈で紹介したり、『信濃殖民誌』を編集したり、佐藤寅太

その形が整いだす困難ななか、一九二三年永田稠らが中心になって「信濃海外協会」を設立させた。県の補助金三〇〇〇円・国の補助金五〇〇〇円で各都市に支部を作り、会員を募集し、調査や講習会・機関雑誌「海外」を発行した。そして、この協会が中心となって、一九二五年、サンパウロに「アリアンサ（一致・協力・和合）移住地」（五〇〇〇町歩、約一五万円）が開かれ、三府四県からの応募に広められ、長野県からは九二家族一八二人が入植した。

北海道移民は、明治期に続いて大正期から昭和期も続いた。このうち、一九一〇年（明治四三）に始まった第一期拓殖計画の取り組みなどが浸透して、一九一五年から一九二〇年まで、毎年移住者が二万戸を超えて、空前の移住ブームを呼んだ。一九三二年四月四日付で、北海道庁長官佐上信一から長野県知事への自作農

許可移民募集の要項が届けられた。そのなかの資料から、表3を作成した。一九年には、千曲川改修工事のため東福寺村（長野市篠ノ井）から移住した七戸も含まれている。

その「北海道自作農移住者募集」の要項では次のように記されている。

- 募集戸数・約一二〇〇戸
- 出願期限・第一回昭和七年八月三一日、第二回昭和七年一月三〇日
- 移住出願・移住補助願に市町村長の証明書等を添えて、原住地の府県庁を経由
- 農業有望・現在既墾地八五万町歩、今後なお七三万町歩は農耕に利用しうる。そのうち、水田適地が約二四万町歩。もちろん、水利の便ある箇所。
- ここまで北海道移住の経過とこれからの展望について、国と県で検討審議されたのか対応にくいちがいがみられる。この要項上では、まだまだ移住対象に有望の地である。その北海道開拓についてのポスター一〇〇枚と募集要項一五〇〇枚が送付案内とともに長野県下各地に届けられていたと考えられる。
- 「分村計画は他になかつたもので、私たち自身で考え出したもの。最初は青年を北海道へ送り出そうと計画した（一九三五年のこと）。それをヒントに堀川清躬氏と相談して満州移民を考えた。」「北海道移民には、三人の青年が行くことになり、壮行会を開いたが、来たのは一人だけだった。」と、北海道への移住の夢に託す姿があった。ところが、国では一九三〇年から財政緊縮方針をとり、拓殖費予算削減へ向かい、折りしも二年続きの大凶作などの災害もあって北海道移民は急速に先細ってしまった。

3 満州愛国信濃村建設運動と移民計画

信濃海外協会は、一九三二年（昭和七）三月長野県知事石垣倉治を委員長に、「満州愛国信濃村建設委員会」（委員三三人）を組織した。さかのぼつて一月に東京長野県人会総会の席で、満州移民調査が決定され、その人選まで進んでいた。その動きは早く、ただちに移住計画の五項目が決定された。

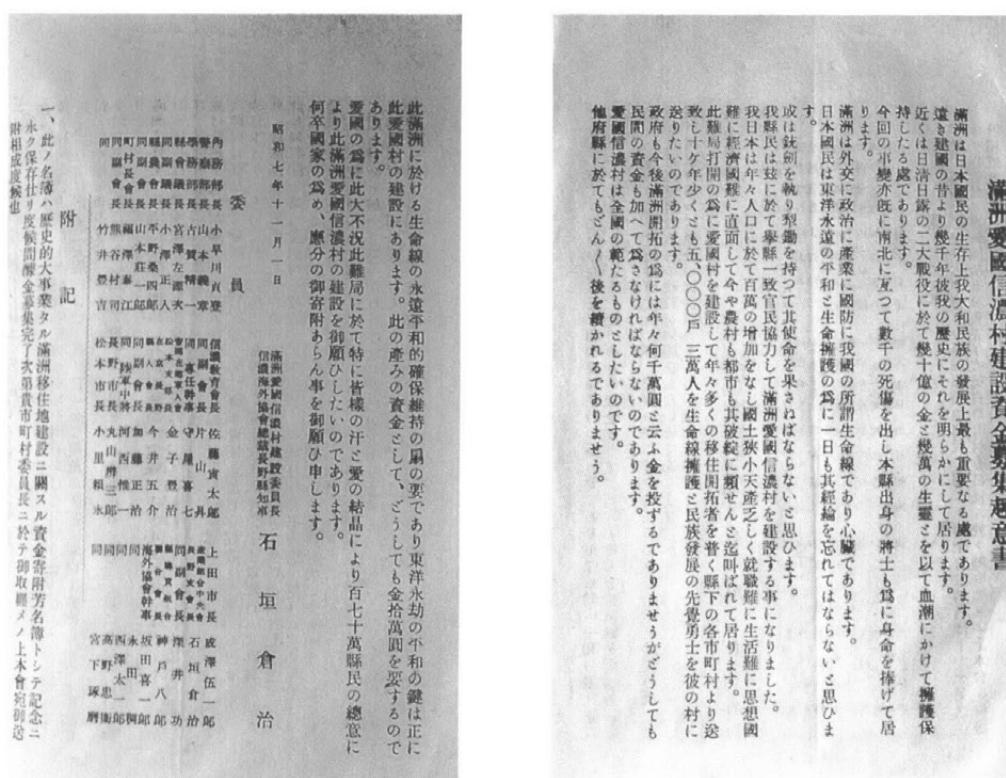


写真 満州愛国信濃村建設資金第1期10万円募金運動
(注)長野県立歴史館蔵

○ 第一期の資金一〇万円とし、各郡市町村に割当額による。募金は各郡市町村委員を嘱託す。

一九年には、千曲川改修工事のため東福寺村（長野市篠ノ井）から移住した七戸も含まれている。

その「北海道自作農移住者募集」の要項では次のように記されている。

- 市町村委員を嘱託す。
- 資金は海外協会の特別会計とし、県の監督下に管理す。

○ 第一期の資金一〇万円とし、各郡市町村に割当額による。募金は各郡市町村委員を嘱託す。

一九年には、千曲川改修工事のため東福寺村（長野市篠ノ井）から移住した七戸も含まれている。

その「北海道自作農移住者募集」の要項では次のように記されている。

- 募集戸数・約一二〇〇戸
- 出願期限・第一回昭和七年八月三一日、第二回昭和七年一月三〇日
- 移住出願・移住補助願に市町村長の証明書等を添えて、原住地の府県庁を経由
- 農業有望・現在既墾地八五万町歩、今後なお七三万町歩は農耕に利用しうる。そのうち、水田適地が約二四万町歩。もちろん、水利の便ある箇所。
- ここまで北海道移住の経過とこれからの展望について、国と県で検討審議されたのか対応にくいちがいがみられる。この要項上では、まだまだ移住対象に有望の地である。その北海道開拓についてのポスター一〇〇枚と募集要項一五〇〇枚が送付案内とともに長野県下各地に届けられていたと考えられる。
- 「分村計画は他になかつたもので、私たち自身で考え出したもの。最初は青年を北海道へ送り出そうと計画した（一九三五年のこと）。それをヒントに堀川清躬氏と相談して満州移民を考えた。」「北海道移民には、三人の青年が行くことになり、壮行会を開いたが、来たのは一人だけだった。」と、北海道への移住の夢に託す姿があった。ところが、国では一九三〇年から財政緊縮方針をとり、拓殖費予算削減へ向かい、折りしも二年続きの大凶作などの災害もあって北海道移民は急速に先細つてしまつた。

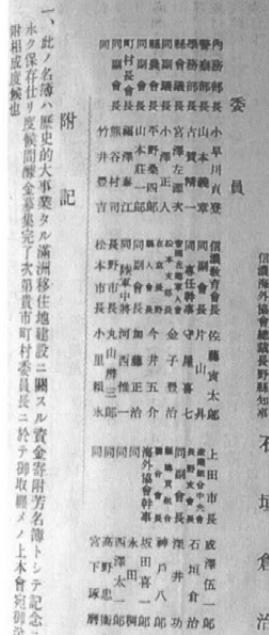


表4 日本・長野県における1932年（昭和7）の主な出来事

	全国の動向	長野県の動向
2. 5	関東軍、ハルビン占領。	
3. 1	「満州国」建国宣言。首都長春、新京と改名。人口3000万人。	
3.28		信濃海外協会、満州国に愛國信濃村建設10ヵ年計画策定。委員も選出。
4. 7		県、農村経済改善委員会規定を制定。経済再生計画を実施する。
5.15	五・一五事件。犬養首相を暗殺、高橋蔵相更迭。	
6. 1		長野県臨時県会「満州ニ於テ信濃村建設ニ関スル件」の意見書可決。
8.15	満州移民費の予算総額207,850円（1,000人の移民）が予算閣議通過。	
8.17	拓務省と陸軍省「北満州方面に対する在郷軍人移民選定要綱」決定。	
8.22	拓務大臣官邸で移民募集に関する、第一回会議開催。	
9.15	日満議定書調印（日本、満州国を正式承認）。	信濃教育会より満州視察員5名派遣。研究室を付設。
10. 3	第一次移民団492名（内39名長野）出発。14日佳木斯着。夜匪襲。	
12. 1	満州国に、日本大使館開設。	
3.20	拓務省提出の満蒙移民追加予算案、閣議で否決。	

(注)『長野県政史』別巻他より作成。

入植者の家族は労働者一人以上あること。

- 移住者資金一戸三〇〇円以上とす。
- 一ヵ年に、五〇〇戸を入植せしむる日途。

この計画のうち「満州愛國信濃村建設資金第一期」（〇万円募金運動）（写真参照）では、さっそく一戸当たり三五銭平均として募金が始められた。熱心に全村隈なく協力する地区の話や、呼びかけに応じた父母に小学生まで応援する姿が報告された。その反面、全国農民組合系などの積極的反対や、不況下の県民の「消極的反対」もあり、事務局体制などの問題も重なって、地区ごとだけの集計にとどまり、全県的なまとめもされず頓挫してしまった。しかし、その取り組みだしだ願いは内側に力を秘めて次のステップへの待機の形になった。つまり、布拉ジル移民と北海道移民に入れ替わる形で、急展開する「満州移民への外堀」が埋められていく姿につながった。そして、この時期、「自治農民協議会」や「北信不況対策会」などが、署名を集めて請願運動しているなかに「満蒙移住費五千万円の補助を」と具体化されていく。県下の経済更生運動の本命として、満州移民こそが太く結びつく状況が生み出されていくのである。

このことを一九三二年（昭和7）の年表でたどると、政情不安や追加予算案の否決の中で、満州国誕生へと諸事が急テンポに進んでいく。それらの姿からは満州移民事業が日本の難局を展望する施策とは言いがたい。この前年九月一八日には関東軍の満鉄線爆破を契機にした満州事変が起り、その終息への見通しも打ち出されない最中の移民開始であった。ただ、国内の社会経済の矛盾を満州における植民政策で解決しようとする政策が満州移民であったのである。

永田稠は満州移民の始まりの背景・事情について「満州事変の当初は、満州移民不可能論が極めて強烈で、満鉄そのものが、除隊兵移民や大連農事会社で、満州移民をやり、関東庁でも愛川村移民を実施したが、うまくいかなかつたから、結局、満州移民はだめだというて、満州移民不可能論は有力なものであった。然るに、関東軍特務部内に、移民部が特設され、満州移民強硬論を主張し、万難を排して移民用地の買収・満州拓殖公社・鮮満拓殖公社の設立から、後には満鉄の

鉄路自警移民村の建設等と、漸次満州移民論が実現するに至った。⁽¹⁰⁾ と展開している。また、長野大学講師・塚瀬進の調査でも、満州に根を張り「日本の生命線」なる国策会社「満鉄」において一九三〇年当時、「満鉄沿線以外の奥地での（大豆の）輸送業務が、重要性を増したにもかかわらず、（日本人）社員の奥地に対する認識は低かった」と報告されて、満州開拓前史からの厳しさが読み取れる。

信濃毎日新聞主筆桐生悠々は、一九三二年三月一九日に自社の「信濃毎日新聞」の社説で満州移民について論述している。

大満州国建国前後に於て、過剰人口に苦しみつつある我が国が、各府県が、目下行詰りつたり、そして将来に於ては、更に行詰だらうと思はれる農村の窮境打開策として、早くも、集団的移民をこれに送るべく計画しつつあるのは、機宜を得た政策又は措置といはなければならない。否、この移民問題こそは、現在の我國に取っては、最重要なる問題の一つである。我信州もその例に漏れず、昨今この集団的移民を満州に送るべく、あすこ此處に計画されつある。特に、我信州には、組織立った信濃海外協会なるものがあり、率先これを計画しつつあるのは、実に人意を強うするに足りる。信濃海外協会は、過去に於て、南米移民に関して、既に多大の功績を挙げている。この確実なる協会が、この場合、乗出すならば、我信州の満州移民が成功するだろうことは疑いを容れない。⁽¹¹⁾

この記事の反響は大きく記事記載直後の満州移民の希望申込みが三〇〇人以上に達した。満州移民の流れは、急速に進展していった。

三 満州開拓事業の経過

1 試験（武装）移民時代の開拓団

「昭和七年は、安穩を許さない転換の時代であった。第一次開拓団は現地で當農の苦しみと、生産への喜びに生甲斐を感じて働いていた。」と、『弥栄村史』⁽¹²⁾は

記している。この時の移民候補者の資格については、

- ① 農村出身者にして、多年農業に従事し経験を有する既教育在郷軍人中、身体強壯（特に胸部及び神經系疾患並びに脚氣の後遺症なき者）、品行方正、思想堅実、困苦欠乏に堪え得る者。
- ② 在隊間及び在郷間の成績良好なる者
- ③ 家庭事情の繫累少なき者（成るべく一男以下の者を可とする）
- ④ 年齢三〇才以下の者、但し特定の者に限り三五歳以下とする。
- ⑤ 独身者・妻帶者なるとはとわざるも、渡満後一・二年間は独身生活に差支えなき者

と、特定している。

一九三二年（昭和七）八月二二日、帝国在郷軍人会が陸軍省から移民候補者の選定を依頼され、「満州移民」は公文書によって初めて募集された。県下では在郷軍人会松本支部を経て関係市町村の在郷軍人分会が取り組んだ。九月一〇日には訓練所入所の指定を目前にして、その多くは、軍人分会长が目ぼしい人を個別に訪ねて説得し、承諾を得て推薦し決定となった。そして、長野県からの三九人を含め東北・関東の一県から四九三人が軍帽・軍衣・軍靴・巻脚絆等軍装一式の交付を受けた。「その早速の訓練内容は、開墾作業が主に、次いで柔剣道や軍事教練もおこなわれ、その間精神訓話や講義もあった。食事は、わざわざ大陸食に慣れるためにと粗末だった。日課の中では、毎日屋外に造られた皇太神宮の前に長時間正座をして黙想をさせられ、一〇キロほどの駆足も毎朝おこなわれた。これら特別行事に不満の声も出て、長野県一人を含め一二人が脱落した。三週間の訓練のあと、いったん帰郷し、一〇月三日、神宮外苑の日本青年館に集合した。総員四二三人は、各県ごとの名称をつけた小隊に分けられ、三個小隊を一個中隊とする三個中隊で大隊が編成された。大隊長が総指揮にあたり、警備指導員五人のうち三人が中隊長となり、他の幹部と本部付きとして、『佳木斯（チャムス）屯墾第一大隊』の編成を終えた。長野小隊の隊長には高山利政少尉が選ばれた。編成が終わると徒步行進で宮城に向かい、皇居を遙拝、拓務省で大臣以下の

表5 長野県からの満州開拓団在籍数

送出形態	団数	戸数	在籍人員	引揚げ	死亡	未帰還	不明
試験（武装）移民団	6	187	833	248	438	13	1
自由・分散・自警移民団	6	387	1591	988	356	27	19
全県編成開拓団	4	1207	5371	1237	3018	208	11
	(1)	(33)	(33)	(22)	(9)	(1)	(1)
分村移民開拓団	12	1419	6945	2273	2459	177	67
	(6)	(165)	(166)	(80)	(38)	(9)	(1)
分郷移民開拓団	24	2596	10025	3241	4869	326	46
	(11)	(279)	(282)	(162)	(89)	(5)	—
集合・農工帰農開拓団	11	480	1920	915	657	54	9
	(3)	(69)	(69)	(34)	(27)	—	—
報国農場	4	457	467	309	113	6	4
創設期の義勇隊開拓団	3	138	160	15	11	—	—
全国混合編成義勇隊	18	1520	1701	293	124	14	11
長野県単独義勇隊開拓団	11	2880	2946	709	212	5	8
	(1)	—	(15)	—	(15)	—	—
訓練途上の義勇隊・義勇軍	9	2113	2117	1649	396	—	2
合計	130	13944	33741	11883	12828	845	180

(注1) () 内は勤労奉仕隊・食料増産隊。

(注2) 『長野県満州開拓史(名簿編)』より集計。

た。¹³』という。

地元の中国人は、関東軍による強制的な土地の収用を認めないで武装蜂起した。入植者はその「匪賊」の襲撃に悩まされた。また、「屯墾病」(ホームシック)の発生や団の幹部排斥事件など、當農どころではない状況であった(一九八人が退団)。それでも、三年目には家族を招致して「弥栄村」と命名し、村内の施設や協同組合なども充実し自治制を施行し開墾作業も進展した。そのなかにあって、長野区は満州開拓の模範と注目された。この他、試験移民団として第二次千振開拓団(一九三三年 四五五人 長野県一八人 在郷軍人九五人)、第三次瑞穂村開拓団(一九三四年 一〇七人 長野県一九人 在郷軍人七五人)、第四次開原城子河開拓団(一九三六年 一五〇人 先遣隊)、第四次哈達河開拓団(一九三七年 四四人)が入植した。

2 満州信濃村・長野村の全県的編成の移民開拓団

一九三六年の二・二六事件で、広田弘毅内閣が成立した。その後数回の閣議を経て、八月二十五日の閣議で七大国策が決定された。ここで初めて、力を注ぐ重要な国策の一つとして満州移民事業が本格的に開始された。関東軍と陸軍省は満州大量移民に最も熱心だったが、大蔵省(大臣高橋是清)の反対や農林省の不一致(南米ブラジル方面、北海道・樺太への移民政策で手がいっぱい)などで実現してなかった。そして、第七〇回帝国議会で「二〇か年一〇〇万戸」送出計画が承認された。その数字の根拠について、「満州国の人口は三〇〇〇万人が二〇年後には五〇〇〇万人に達する。その時の一割、五〇〇万人・一家族五人として一〇〇万人の内地人を植え付け民族協和の中核たらしめるため」と、拓務省は説明している。

長野県ではこの案を先取りするかたちで、先に挫折した「満州愛國信濃村建設計画」を再燃させて、「信濃村建設計画」を独自にたて、六月には「満州農業移民募集に関する件」を学務部長名で各町村に通牒した。一一月には五か年以上の送出計画を作成するよう要請、この年東安省密山県に「第五次黒苔信濃村」(三四〇戸 一五三人)を入植させた。続いて、翌年六月には、「第六次南五道嶺長

ル程下航して、吉林省樺川県永豊鎮に一〇月一五日早朝上陸、八時に兵舎に入つ激勵の挨拶・訓示を受けた。隊員は平均年齢二六歳であったが、長野県人は大学卒が六人もいてインテリ小隊と言われ注目の的となつた。一行が大連経由で哈爾浜(ハルビン)に到着したのは、一〇月一日であったが治安が不安とのことで松花江の埠頭の船倉に仮泊した。そして、軍護衛船の案内で四〇〇キロメート

野村」（一九三戸・九七一人）、一九三八年（昭和一三年）三月には「第七次中和鎮信濃村」（一八〇戸・一〇〇人）、そして、一九三九年一月には「第八次張家屯信濃村」（三〇七戸・一〇〇人）と、どの団も長野村か信濃村と命名され、全国に先がけての県単位編成の開拓団を組織し、いずれも一〇〇〇名を越していた。この期になると、入植から當農への手順が定着ってきて、先遣隊の内でも基幹先遣隊の任務が明確にされ指導員の配置も大切にされた。従って、家族の招致から個人経営への切りかえ、開拓協同組合への移行など団全体の行政も整つていった。黒台信濃村では、一戸当たり水田〇・五（一ペル）、畑五〇（一ペル）を耕作し、麦類・玉蜀黍・大豆・野菜の栽培に成果をあげた。また、育苗と植林、家畜事業にも力を入れ、さらに、村の広報の発行や医療・学校教育施設の充実にも努めた。そのうち、氏子会も組織され満州諏訪神社が建立されたりした。

さらに、開拓移民をめぐる機構と制度もいくつか整えられた。一九三七年には移民の促進・後援を目的とした満州移住協会と、開拓移民の土地取得、管理をおこなう満州拓殖公社が設立された。ついで、開拓団を管理する開拓総局が一九三七年二月に設置された。また開拓政策の指針を示した「満州開拓政策基本要綱」（一九三七年二月）や「開拓団法」（一九四〇年五月公布）・「開拓共同組合法」（一九四〇年六月公布）、「開拓農場法」（一九四一年一月公布）などの関係法令も制定された。しかし、満州国では最後まで「国籍法」は成立しなかった。開拓民は満州の大地を耕していくも依然として日本人であった。したがって、日本の兵役義務に縛られ、一九四五年には「根こそぎ動員」されていった。また入植地に設立された学校の管理権は日本がもっていた。

3 分村・分郷移民の開拓団

南佐久郡大日向村（佐久町）では、一九三七年（昭和一二）三月の経済更生委員会で分村計画が決定された。農家戸数三三六戸の中から全戸移住一五〇戸、分家移住五〇戸を送り出し、これによって、明治初期の戸数一五〇戸、人口一一五〇人という戸口（適正農家規模）を満州の地に再現しようという計画であった。

『満州信濃村建設指導要項』では、「本県農家戸数二二万一三三戸中農耕地經營面積五反歩未満の農家は、其の約三割六分にして、七万六〇〇戸を数う。是等不安定なる農家を逐次満州に農業移住せしめ、満州に於ける自作農たらしめて経営の安定と生活の向上を計るとともに、一面県内における農耕地の緩和を計り、農家の基礎を確立して農村更生の実績を認めんとする」にあると示された。

一九三七年六月、大日向村の堀川請躬（せききゅう）団長が茨城県西茨城郡友部町の国民高等学校に入校、九月九日まで訓練を受け、一一日に福井県の敦賀港から出港している。その前七月八日には先遣隊二〇名が出発したが、「その壮行の盛大なることと、本村未曾有なることを特記す」、「新たに満州国に大日向分村を建設することに、残る者も行く者も最善の努力をいたし、一つは自己経済の建直しに、進んでは村経済更生のために、しかも帝国国策に参加することができ得るのである。不言一筋に実行すべきである。理想の天地、肥沃の地、北満はわれらを招きつつあり。行け！ 新村の建設に、残れ元村大日向の建直しに、一大決心をもって参加、記録し、分村移民は全国的に注目された。そして、軍・政府当局の肝いりのモデル村として、また官民こそっての満州開拓移民熱の高まりの姿として、劇化され、映画化されるなどした（入植式一九三八年二月一九日、吉林省）。その後、一九三七年度第八次として、富士見村（一九三九年二月一日、浜江省）、川路村（一九三九年二月一日、三江省）、泰阜村（一九三九年二月一日、三江省）、読書村（一九三九年二月一日、浜江省）、千代村（一九三九年三月一日、三江省）、などの分村移民も送出された。またこの年から、新たに郡単位の開拓団として下伊那郡郷開拓団が結成され、さらに翌年からは更級郷、高社郷、下水内郷、そして、芙蓉郷など第一三次にわたって二十四の開拓団が送出された。

一九三七年（昭和一二年）から一九三八年にかけて、各郡市町村の経済更生計画から分村・分郷計画がつぎつぎ具体化された。だが、国内の農村の経済環境は一変した。徴兵や軍需産業の隆盛で、農村の過剰人口は吸収され、むしろ労働力不足が顕在化しつつあった。大恐慌時に貢当たり一円を割った繭の値は一九三七

年に六円台を回復した。これと裏腹に移民熱が急速に冷え始め移民送出は国家から強制という色彩を濃くする。すなわち、移民は日本と満州を包む戦時動員体制の一環として位置づけられ、国防、食糧増産が主要な目的とされるに至った。

合わせて、「五族協和」、「王道樂土」の建設といった「満州國」の建国理念への協力の必要性が、ひときわ声を大にして叫ばれるようになった。そんな情勢の中、開拓団は多様化して、まず、「集合開拓団」(130戸以下で分散して入植)、「農工開拓団」、「帰農開拓団」で一一団が組織された。そして、一九四三年二月には長野県経済部を主管とした、長野県農業会が経営する「長野県報国農場」が二一個所で建設され、満州勤労奉仕隊が実施された。⁽¹⁵⁾

4 長野県単独の義勇隊開拓団

満州開拓第一次の武装移民入植以来、移民提唱者の加藤完治(日本国民高等学校長、のちの内原訓練所長)と共に東宮鉄男(関東軍司令部付満州國軍事顧問)は、開拓団の現地を訪れ、団員の慰撫と説得にあたつたりした。そして、その体験から「満州移民は何よりも人選が重要で、純真的年少者が適格である。」と青少年移民案を主張した。日中戦争が本格化し、移民適齢者が次つぎに召集されたことを背景に、石黒忠篤(農村更生協会理事長)らが「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建議白書」を提出した。拓務省は閣議(一九三七年一月三〇日)を経て義勇軍制度を創設し、一九三八年(昭和一三)第一次の全国募集をした。長野県からは、一二六人が応募して、茨城県の内原訓練所に入所した。訓練期間は三年間、年齢は一六一九歳で職歴は問わなかった。訓練期間中の生活費・渡航費などは全て支給された。第一次義勇軍は五〇〇〇人の予定であったが、多数の応募者があり七七〇〇人が採用となつた。その募集人数は国から県へ割りあてられ、さらに、市町村の各組織から各小学校へ指示された。学業成績の優秀な次・三男をおもな対象にと、一〇町歩の土地を取得できるうえ、東亜の新建設にも貢献できるといふ話が繰り返され、「教師の指導」の名の下に学校教育が徹底的に利用された。その翌年には長野県単独編成の義勇軍が送出され、続いて一一団まで編成され全

国一位の満州開拓移民の県となつた。

四 満州移民の営農・生活、帰国後の開拓事業

満州開拓が軌道に乗つてからは、団共同・部落共同・組共同、そして個人經營の形態をとつて、適正規模農業經營で家族が自作自営し、安定した生活を維持・向上できるようになつた。

泰阜村分村の現況について「入植地の三江省樺川県大八浪には、伊那谷の山中では想像もできない豊かな農地が待つていて。肥料をやらなくともジャガ芋はおとなのかブン以上も大きくなつた。豊かに実る稻穂の波……『あの泰阜の山中にいれば一生うだつは上がらなかつただろう。きてよかつた。』会合のたびごとといつてよいほど、希望に満ちた話に花が咲いた。ネコの額のような農地にへばりついてる郷里の仲間たちを呼んでやろう。こんな言葉も交わされた。『一・三年たつたら里帰りでもしよう。』郷里に錦を飾つて帰れる見通しあつた。一〇年のことである。⁽¹⁶⁾」と、述べている。

開拓団総局からの農産物の増産、日本への輸出の要請もあって、営農の工夫に取り組み成果を上げた(表7・8)。満州國政府も「興農合作社」(一九四〇年)、「満州農業公社」(一九四一年)を設立し、農産物の管理と流通の向上に取り組んだ。

第一〇次佐久郷(帰農開拓団)での開拓状況について、開拓団員だった日暮千曲は次の通り記している(原文を要約)。

軍用保護馬六〇頭と共に入植。ハイ、ドウの日

表6 満州開拓作付け面積の増加傾向

年	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943
作付面積	10,000	24,000	49,000	91,000	125,000	175,000	239,000
営農戸数	3,100	7,000	12,000	20,000	28,000	37,000	47,000
一戸当面積	3.2	3.4	3.9	4.5	4.5	4.7	5.1

(注) 満州國通信社編『満州國開拓年鑑』(1944年)による。

表7 1942年満州開拓地
作付け面積 (単位: 箇)

作物品名	作付け面積
水稻	20,000
大豆	26,500
小麦	11,000
大麦	5,300
燕麦	16,400
高粱	7,000
粟	9,200
玉蜀黍	14,600
その他	40,000
合計	150,000

(注) 満州通信社編『満州開拓年鑑』
(1943年)による。

大豆畑も、ポーミー畑も大麦・小麦もしっかり実り、落ち着いた秋を迎える。
満州の秋は短い。収穫が大変だ。作物は鎌で刈り取る。中國人も雇つて大車で脱穀小屋へ運ぶ。そして、厳寒の冬に、地面の凍るのを待つて脱穀をする。馬に石のローラーを引かせ、風運する。

本語が通じる。初めての人間には馬具その他意のままにならず、その苦労は並々ならず。地区内に住む中国人を使つたり、彼らの手引きを受けたりで、すき起こし、地ならし、敵立てを繰り返す。輪作中心の在来農法と、北海道農法の改良の両用でいく。播種の時は順調で、ブヨやシオカラも出ないで、広大な畑に緑の芽が整然と果てしなく出た時は感激もひとしおだった。北満州の気候は日照時間が長いので植物の成長はことに早い。「南瓜の蔓が五〇センチも伸びる」もまんざらではない。日本で使う野菜はほとんど出来た。そんなための「開拓地農法の改良点」は

イ 飼料作物・根菜類の新種の導入で、飼料の確保と土壤の改良
ロ 役畜の繁殖、乳用の山羊・牛、肉用の豚・羊に鶏、蜂蜜。余剰分は販売。

ハ 基本農具—再墾プラウ、レバハロー、畔立器、除草ハロー、カルチベ

ーター、三畦カルチ(各戸)、三条麦播器、豆播器、小型リーバー、

デスクハロー(共同)

ニ 春耕播種と秋耕播種に分け、労力の関係で、麦類は不耕起播種式を併用する。

などで、「作業能率が高く、広い面積が出来る。」「圃場全体深耕でき、雑草を防ぎ、作物の生育良好」「鉄材のため構造が精密で堅牢」「畦幅を自由に変えられる。」等々あげられた。

本語が通じる。初めての人間には馬具その他意のままにならず、その苦労は並々ならず。地区内に住む中国人を使つたり、彼らの手引きを受けたりで、すき起こし、地ならし、敵立てを繰り返す。輪作中心の在来農法と、北海道農法の改良の両用でいく。播種の時は順調で、ブヨやシオカラも出ないで、広大な畑に緑の芽が整然と果てしなく出た時は感激もひとしおだった。北満州の気候は日照時間が長いので植物の成長はことに早い。「南瓜の蔓が五〇センチも伸びる」もまんざらではない。日本で使う野菜はほとんど出来た。そんなための「開拓地農法の改良点」は

イ 飼料作物・根菜類の新種の導入で、飼料の確保と土壤の改良
ロ 役畜の繁殖、乳用の山羊・牛、肉用の豚・羊に鶏、蜂蜜。余剰分は販売。

ハ 基本農具—再墾プラウ、レバハロー、畔立器、除草ハロー、カルチベーター、三畦カルチ(各戸)、三条麦播器、豆播器、小型リーバー、デスクハロー(共同)

ニ 春耕播種と秋耕播種に分け、労力の関係で、麦類は不耕起播種式を併用する。

などで、「作業能率が高く、広い面積が出来る。」「圃場全体深耕でき、雑草を防ぎ、作物の生育良好」「鉄材のため構造が精密で堅牢」「畦幅を自由に変えられる。」等々あげられた。

満州の秋は短い。収穫が大変だ。作物は鎌で刈り取る。中國人も雇つて大車で脱穀小屋へ運ぶ。そして、厳寒の冬に、地面の凍るのを待つて脱穀をする。馬に石のローラーを引かせ、風運する。

開拓地の教育については、単なる学校教育ではなく、開拓団としての教育に力を置き、一般学校教育の方針に則りながらも開拓地の実情に即した教育として、特に家族主義、協同主義、國土愛護と勤労開拓の精神の昂揚に力が入れられた。開拓精神のしっかりした後継者の育成は「五族協和」「王道樂土」と結んだ、強い願いだった。ところが、「且下、開拓地の最も憂べきことは、青年男女の離村で、都会の事務員、職工、駅員になりたがっている。」と、『佐久郷』でも、強く訴えていた。

一九四五年(昭和20)八月九日ソ連の参戦を境に、総ての開拓地で日本人は追われて、満州国は消滅した。その終戦時、一〇万二二三九戸、二二万〇九六八人にのぼった開拓者のうち、東北地区で死した人は四万六〇〇〇名、抑留・不明が七万〇〇〇〇名、なんとか祖国へ帰り着いた人は半数の一一万〇〇〇〇名にしか過ぎない。その峻厳な事実のもと、「①領土拡張のための海外移住はやるな。②原住民の権利を侵す海外移住はやるな。③國家権力による強制的な海外移住はやるな。④短兵急な海外移住はやるな。」と、満州移民について反省している(『海外移住事業団十年史』一九七三年)。

一九四五年、四六年の混亂期を生き抜いて満州から帰国した長野県開拓団関係の引揚者は一万六〇〇〇人に達する。国では一九四五年一月「緊急開拓事業実施要領」が閣議決定された。これを受けて、一九四六年四月、長野県でも開拓第一課・二課が設置され、開拓帰農組合が結成された。

八ヶ岳山麓の野辺山原(南牧村)は平均標高一三五〇メートル、最暖月(八月)の気温一九・二度の高冷地帯である。一九四三年には約二〇〇〇名程の兵隊が三六六棟の兵舎に駐屯していた。終戦の虚脱の中、食糧問題と人口収容政策の一助にと部隊の残留者二七名、台湾製糖の引揚げ者三二名など合計一二〇戸が入植し、三六〇町歩の野辺山開拓が開始された。ところが、道路や小川や排水溝など除くと、戸当たり平均可耕地は二町歩くらいになり、一〇町歩なければ自立安定経営は成立しないという問題を抱えた。

一九四七年(昭和22)には野辺山開拓団が結成され、翌年には野辺山開拓農

業組合が結成された。入植の動機を異にし、土地配分と土地拡大の問題を抱えたながら、初代の組合長に選出された黒岩競^{（ひがい）}は、満州開拓（當農指導員）の厳しい体験と教訓をかみしめ、厳しさに耐えながら行動する不撓不屈の開拓精神の礎石を築く取り組みをした。そして、五か年計画の総事業費一億五〇〇〇万円の規模で、二四〇町歩におよぶ土地取得事業や高原野菜生産販売事業が展開された。黒岩競は再度組合長に就任して、一九三一年には全戸電気を導入し、電気の明かりと共に開拓に一層の光明がさしこんで、ラジオ・テレビ他の文明の利器が入って人間らしい生活が出来るようになつた。それらの実行実績が評価され、野辺山開拓団組合は一九六〇年（昭和三五）信毎文化賞に一九六二年朝日農業賞と輝き、今日の高原野菜の一大産地の繁栄を生み出している。

第二次大戦後の開拓史を位置づけた市川健夫は「満州における農業経験を生かした野辺山開拓地のような高冷地における商業的混合農業は最も理想的な型である。」「野辺山地区に典型的な商業的混合農業が成立した要因は広い耕地で合理的な輪作が可能であること、集落形態を散村にして酪農経営の立地条件を良好にしたこと、自然条件に適した蔬菜栽培と酪農経営に徹したこと、開拓農協による農業経営の協業化、交通の便の良いことなどあげることができる。」と、評価している。

五 まとめ

- (1) 長野県下の昭和恐慌の状況は、それ以前の明治・大正期に発展・繁栄した蚕糸業を、前例にない暴落による大打撃によって社会・経済全体を萎縮させた。その対応として臨時県議会で、県独自の新施策が議決され、産業振興・農村振興・失業者救済の土木事業の強化などが取り組まれた。さらに負債整理のために農村経済更生運動が進められた。しかし、負債整理の解決はなかなか困難で、国策となつた満州開拓事業と結びつけられて解決がはかられた。その間、信濃海外協会がブラジル移民の経験を生かして、愛国信濃村建設運動へ組織を上げて調査・宣伝・啓蒙・署名・募金などに取り組んだ。この結

果、一度は停滞した満州移民が、広がりをもって進められた。

(2) 満州開拓の経過では試験移民開拓団期から長野地区が模範として注目された。第六次・七次・八次では、信濃村か長野村と命名された全県編成の開拓団の送出から、全国初の分村・分郷開拓団、県単独義勇隊開拓団の送出がなされ長野県からの大量移民の流れが明らかになった。その開拓団の形態が変わる時には長野県が独自に先取りしている。一九三二年は、二月に哈爾浜（ハルビン）付近で交戦があつたばかりなのに、一〇月にはもう開拓団が入植するなど異常な速さで移民が進められた。それらは潜行していた軍部の政策に拓務省が結び着く過程で、長野県では「官民一体」という形で「大量移民」がなされたのである。この開拓移民事業は「五族協和・王道樂土」のスローガンのもとに大義名分が整えられた。このスローガンは、漢族など他の四族には理解を得られなかつたが、移民する人たちの共感を呼んだ。一九三七年の日中戦争の勃発とともに、日本国内における食糧不足が顕著になり、満州移民による食糧増産が軍部を中心とした政府から要請された。

- (3) 満州の在来の農法は、大豆・高粱^{（こうりょう）}・粟の三年輪作を基にトウモロコシ・小麦も加えた主穀農業であった。広い面積で粗放的畑作を営んだがその生産性は低かった。その改善のため開拓総局を先頭に農具の改良や畜力農法の普及で、それぞれの開拓改良農法が確立されていった。有畜農法によって、自家可耕面積も増え、地力も肥沃化され生産力も向上した。だんだんに将来への農業発展の希望がみられるようになつたときに終戦になつた。そのときの各開拓団での殺戮と破壊と混乱とは筆舌に尽くし難く、一万五〇〇人もの犠牲者を弔うことになつた。数々の厳しさを乗り越えて満州からの引き揚げた多くのひとが、再び野辺山（南牧村）や大日向開拓地（軽井沢町）に入植して、農業を営んだ。その際満州における農業経験が生かされた。

民』龍溪社、一九七六年)。

¹⁹ 市川健夫『高冷地の地理学』(令文社、一九七一年)。

- (付記)私は一九四一年、父の転勤とともに中国に渡り、北京市城東第一小学校に入学した。後に、一九八二年から三年間、上海日本人補習授業校で奉職した。それへのことだから長野県開拓自興会主催の「満州最後の旅」で、かつての第五次黒谷信濃村・第六次南五道岡長野村(東安省密山県)の地を訪問させてもらった(報告書『長野県開拓自興会一〇〇〇年記念誌』)。現地の人と、当時の営農のようすや、小学校への道すがら出会ったことなど語りあった。今一度、かつての満州開拓のための大量移民の歴史はなんだったのか、さらに、引き揚げた開拓民が、「緊急開拓事業」に成功した事例について、考察を進めたいと思っている。
- 4 信州大学日中シンポジューム実行委員会(代表上條宏之)『近代日本と満州』(銀河書房、一九九五年)。
- 5 長野県政史編集委員会編『長野県政史』第二巻(一九七一年)。
- 6 小林弘一『満州移民の村』(筑摩書房、一九七七年)。
- 7 「昭和六年 失業救済農業山漁村臨時対策低利資金償貸許可稟請書1」地方課、長野県立歴史館蔵。

庶第四一号、昭和六年四月一六日

南佐久郡野澤町長 並木齡輔

長野縣知事 鈴木信太郎殿

起 債 許 可 稟 請

失業救済農村漁村臨時対策事業資金並転貸資金ニ充ツル為起債ノ件別紙ノ通り町会ニ於テ議決候ニ付御許可相成度左記書類添付此段及稟請候也 (後略)

8 永田稠『信濃海外移住史』(信濃海外協会、一九五二年)。

9 山田昭次『近代民衆の記録』(新人物往来社、一九七八年)。

10 注8参照。

11 桐生悠々『新満州に於ける信濃村の創造』(『海の外』第一一八号、一九三二年)。

12 弥栄村史刊行会『弥栄村史』(一九八六年)。

13 長野県開拓自興会・満州開拓史刊行会『長野県満州開拓史』一〇三(東京法令、一九八四年)。

14 日暮千曲『佐久郷』(佐久郷刊行委員会、一九九五年)。

15 注13参照。

16 信濃毎日新聞社編『平和のかけはし—長野県開拓団の記録と願い』(信濃毎日新聞社、一九七六年)。

17 注14参照。

18 19 注14参照。